

資料紹介

逓信省職員一同による大正大礼献上品 《日本交通図絵》

倉地 伸枝

はじめに

大正4年11月10日、昭憲皇太后の崩御により延期されていた大正の大礼（即位の礼）が挙行されると、天皇皇后両陛下に全国の官民諸団体や個人から奉祝の意を込めた品々が献上された。内閣書記官室記録課が発行した『大礼記録』には、それらの「献上品ノ重ナル者」として「逓信省部内職員一同」から天皇陛下へ「日本交通図絵」一部と、皇后陛下へ「書棚」一基が献上されたことが記録されている⁽¹⁾。

皇室の所有していた美術品類のうち6,000余点は平成元年に国有財産となり、平成5年からは宮内庁三の丸尚蔵館（令和5年より皇居三の丸尚蔵館）で管理されている。同館に伝存する大正大礼献上品については、平成19年の「祝美—大正期皇室御慶事の品々」展や令和元年の「大礼—慶祝のかたち」展を通じて報告がなされてきた⁽²⁾が、これらに逓信省による当該の献上品は含まれておらず、令和2年に筆者が照会した際にも収蔵自体が確認できないとの回答であった⁽³⁾。これらは国に寄贈されず現在も皇室に残されているか、もしくは何らかの理由で散逸してしまったと考えられる⁽⁴⁾。

本稿ではこのうち天皇陛下に献上された《日本交通図絵》に焦点を絞り、当館に残された資料からその概要を紹介したい。大正大礼献上品については三の丸尚蔵館による調査報告のほかは、東京府献上品に関する令和4年の論文⁽⁵⁾を除いて例が見当たらない。このような研究の乏しさは、一般的に献上品は現物が皇室の側に、制作経緯などを示す資料が献上者の側にと別れて伝わり、一体的な資料調査が難しいことが一因と推測される。当館には幸い、関係者が献上品について報告した雑誌記事と、その制作過程で作成された校正用写真帖が伝わっており、これらからある程度その全体像を復元することができる。第一章ではこれらの資料の性質を確認したうえで献上品の造形と献上までの経緯を整理し、第二章ではより詳しく、献上者と資金、

- 1 大礼記録編纂委員会編『大礼記録』内閣書記官室記録課（清水書店頒布）、大正8年、703-704頁。同委員会が編纂した大礼記録には宮内省図書寮と内閣文庫に保存するための第一種と、その本旨を一般国民に周知するための第二種があり、本書は後者に該当する（同書1頁、所功『近代大礼関係の基本史料集成』国書刊行会、平成30年、492-494頁）。
- 2 宮内庁三の丸尚蔵館編『祝美—大正期皇室御慶事の品々』（三の丸尚蔵館展覧会図録No. 45）宮内庁、平成19年、同前『大礼—慶祝のかたち』（同前No. 85）同前、令和元年。
- 3 宮内庁三の丸尚蔵館担当学芸員（当時）より私信（令和2年7月30日）。
- 4 同館は大正期に献上された美術品について「一体どれくらいあったのか、その詳細を把握することは困難であるし、現存する品はそのほんの一部であろう」との認識を示している（太田彩「大正時代の御慶事と美術品制作」前掲『祝美—大正期皇室御慶事の品々』、4頁）。
- 5 高橋洋子「大正大礼の東京府献上品「笠翁式書棚」：高橋五山の図案と御蔵島産桑をもとにした能楽模様作品」『法政大学大学院紀要』第89号、令和4年、52-60頁。

画題と揮毫者の選定、制作過程といった諸問題について検討を行いたい。

1 《日本交通図絵》の概要

(1) 献上品に関する資料

第一の資料は大正7年4月の『通信協会雑誌』「雑録」欄に樋畑雪湖（1858-1943、本名は正太郎）が寄せた「献上品に就て」という記事で、白黒口絵1頁と約4頁の本文からなる⁽⁶⁾。執筆者の樋畑は長野県庁勤務を経て明治18年に通信省に出向、明治25年に郵務局計理課物品掛長となり、明治35年に創設された郵便博物館（明治43年より通信博物館、現郵政博物館）の主任として、大正12年の退任まで館活動を主導した人物である⁽⁷⁾。大礼献上品制作にあたっては全体の進行に関わる幹事のような役割を務めたものと思われ、本記事も「計算の報告等は何れ委員の方々から報告があるであらうが、着手から、献上に至る迄の手続はかたくるしき報告書より、平びつたく書いて雑誌で報告した方が却て徹底するであらうとの評議の儘に」書いたと述べられており、関係者として報告を任されたものであることがうかがえる。なお、ここで予告されている「計算の報告等」は同誌の後続号やそのほかの資料にも確認できず、献上品に関するまとまった記録としてはこれが唯一知られるものである。



【図1】画題校正用写真帖「日本交通図絵 桜の巻」(SAA-87) (左)表紙 (右)開いた状態 (第1図) 閉じた状態の外寸：25×33.4cm、写真：約20×23.5cm、画題紙：約14×20cm

第二の資料は郵政博物館に伝存する「日本交通図絵 桜の巻」、「同 葵の巻」、「同 菊の巻」(SAA-87~89)と題された3冊の写真帖である。これらは灰色の厚紙を平綴じにして青色の表紙（葵・菊の巻は褐変）を付した冊子で、いずれも開くと左側に絵図の写真、右側にその揮毫者と画題案を記したとみられる和紙が貼付され、各冊見開き12頁からなる【図1】。「桜の巻」冒頭の図に付された和紙には、左端に「以下の赤字ハ六年十一月十二日三上博士の検閲を経て字句の修正を為せる（樋畑印）」⁽⁸⁾との朱書きがあり、実際に各図の画題案にはとところどころ朱筆の書き込みがみられることから、この写真帖は献上品制作の過程において、画題校正用に作成されたものと考えられる。次項では、これらの資料にもとづき献上品の造形と献上までの経緯について整理したい。

6 樋畑雪湖「献上品に就て」『通信協会雑誌』第118号、大正7年4月、口絵及び16-20頁。

7 樋畑雪湖については、横山要編著『樋畑雪湖年譜』（非売品）、昭和57年、井上卓朗「郵政資料館所蔵資料概要」『郵政博物館 研究紀要』創刊号、平成22年3月、97-98頁。

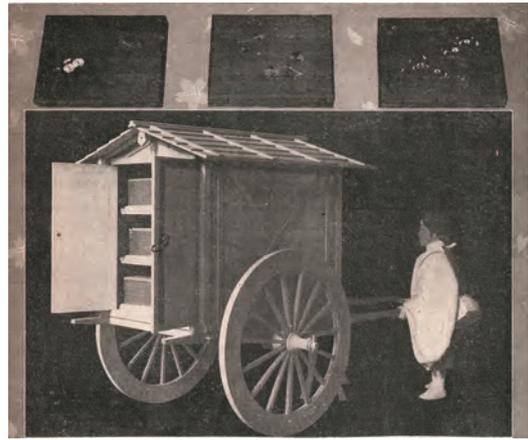
8 難読箇所については郵政博物館の田原啓祐主席学芸員に助言を仰いだ。

(2) 献上品の造形

樋畑の記事によれば、《日本交通図絵》は上中下巻の3冊からなる画帖を特製の外函に納めたものである。この外函は藤原時代に書庫から書籍などを運ぶのに用いられたという文車を模したもので、高さ2尺78寸（約85cm）の木彫の童子人形がこれに付属している【図2】。この図案は樋畑自らが手がけ、文車は模型匠の萬場米吉に、木彫人形は再興日本美術院同人の吉田白嶺に制作させたという。この文車を開扉すると内部が3段に分かれており、各段に画帖が収納される構造となっている。

この口絵の上段には外函から取り出された画帖が並べられており、各表紙には東京美術学校図案科助教授の千頭庸哉が意匠を手がけたという桜、葵、菊の刺繍が右から確認できる。樋畑は画帖の形式には言及しておらず折本または冊子の別は不明であるが、各巻には絵図と官房秘書課員の近藤富寿が揮毫した画題が12対ずつ貼り込まれたようである。これらの絵図はすべて「交通上重なる事項を画く」、すなわち日本の交通史上重要な出来事を描くものとされ、上巻は「桜の巻 神武天皇御東征以来織田、豊臣時代に至る」、中巻は「葵の巻 徳川時代」、下巻は「菊の巻 明治時代より現代に至る」と、時代ごとに分けて収録されていた。さらに樋畑は「献上品に添へて出したる目録」（以下、「献上品目録」）をそのまま記事中に再録しており、これによって全3巻36図の画題と揮毫者を知ることができる。この情報と校正用写真帖に貼り込まれた写真を統合したのが【巻末資料】である。

この校正用写真帖に貼り込まれた紙焼き写真は平均して20×23.5cm程度⁽⁹⁾で、揮毫者に配布されたという画楨及びカンバスのサイズ縦1尺1寸×横1尺3寸（約33×39cm）を各辺60%ほどに縮小したものである。これらは撮影と印画の精度がよく、樋畑の記事には言及されていない支持体や描画材、署名などの細部についても読み取ることができる。まず画材について、日本画はいずれも布目が視認でき、また白黒の階調から墨画ではなく絹本著色と推測される【図3】⁽¹⁰⁾。一方、洋画は荒い布目と立体的な筆触からカンバスに油彩（第3、6、19、29、36図）【図4】、ざらざらとした紙肌に平滑な筆触から紙に水彩（第10、27、34図）【図5】と考えられる



【図2】「御大礼奉祝として通信部内一統より両陛下への献上品」（出典は註6・口絵部分）



【図3】第22図「早打及継飛脚の状態」（錦木清方）部分
© Kiyoo Nemoto 2024/JAA2 400011



【図4】第3図「僧行基道路を修め渡舟を置き布施屋を設く」（五性田芳柳）部分

9 写真により縦横比に若干のばらつきがみられる。樋畑らが紙焼き写真をトリミングしたためか、もしくは揮毫者が配布された支持体をそのまま使用しなかったために、もともと絵図自体のサイズが揃っていなかったかは不明。

10 ただし、平福百穂の第31図は鉛筆か木炭で描かれているように見え、画稿の可能性もある。

ものの両方があり、さまざまな画材の絵図が織り交ぜられていたことがわかる。また、署名については【図3～5】に挙げた鏑木清方「清方(印)」、二世五姓田芳柳「HGOSEDA」、石川寅治「T-ISHIKAWA^寅」のほか、渡邊審也「SHINYA-W」(第6図)、西村青焔「青焔(印)」(第20図)、小山栄達「栄達(印)」(第23図)に確認できるが、そのほかは無署名であり、署名の有無に関する指定はなかったと考えられる。



【図5】第34図「現代の水力電気甲斐国ハツ澤発電所の光景」(石川寅治)部分

(3) 献上までの経緯

以上に献上品の造形上の概要を確認したが、その献上までの経緯はどのようなものであったのか。樋畑の記事は「御大礼の盛儀を奉祝すべく通信部内一統より両陛下に献上品のことを夫々計画せられたのであるが、其の金額が確定したのは大正五年の春であつた」との一文で始まっており、そもそも発案当初の状況は明らかにされていない。一方、その後の経緯については要所ごとに年月日の記載もあり、大まかな流れを辿ることができる。これによると、大正5年の春に両陛下への献上品に充てる金額が5,926円97銭5厘に達し、同年4月4日に湯川元臣通信次官、各局長、官房各課長らの会議が開かれた。ここで、天皇陛下に「日本交通図絵 一部」、皇后陛下に蒔絵の「書棚 一基」⁽¹¹⁾を献上すること、本件にあたっては湯川次官を委員長に、「中西、米田、影山」を委員とすることが決定された。この三氏は大臣官房経理課長の中西四郎、前文書課長(通信博物館前館長兼務)の米田奈良吉、秘書課長の影山銑三郎を指すと考えられる⁽¹²⁾。その後、樋畑や有識者、各部局局長によって画帖に収める画題の選定が行われ、次いで湯川委員長の囑託により、東京美術学校校長の正木直彦が揮毫者36名を選定した。同年7月21日、湯川委員長が正木とこれらの画家を本省に集めて正式に揮毫の依頼を行い、翌年の大正6年10月下旬頃までにすべての絵図が提出された。その後12月に装演匠の村松和三郎による装釘が仕上がり、大正7年1月16日には通信省側と制作関係者に対して内覧会が行われ、翌17日に献上が行われた。当日は影山が「献上の御使者」を務め、樋畑の護送のもと日本通運会社の人夫がこれを運搬し、宮内省内で消毒と大臣らの内検閲を経て献上が完了したという。

2 《日本交通図絵》の諸問題

(1) 献上者と資金

だが、そもそもこの献上は誰のどのような資金によって行われたのか。冒頭で述べたように、『大札記録』ではこの献上が「通信省部内職員一同」によるものと記録され、実際に樋畑の記事に掲載された受領証の宛名にも「通信部内職員一同代表」と書かれている【図6】。ここで

- 11 東京美術学校図案科教授の島田佳矣が図案を手がけ、蒔絵師の由木尾雪雄が加飾した。歌人・国文学者の井上通泰が選出した和歌「はる—と雲井をさして行く舟の逝くすゑとほくおもふゆるかな」(『拾遺和歌集』巻第十八・雑賀)を蒔絵螺鈿・金銀平脱の歌絵と筆手で表現したものという。なお、樋畑が再録した「献上品目録」には「製作 東京美術学校」と記載されるが、同校の「依頼製作品生産報告簿」には掲載がない(註31参照)。
- 12 通信省『通信事業五十年略史』通信省、昭和11年、54頁、27-28頁。なお、米田は後に「桑山、小林」に交代したと付記されているが、これは後任の文書課長である桑山鐵男(大正5年3月8日着任)と、通信博物館館長の小林精実(大正4年12月2日着任)と考えられる。

献上者の名義は通信省自体ではなくその構成員とされており、この献上が省の事業外で行われたことを物語っている。実際に大正4年度の『通信省年報』には「臨時部歳出 大礼施設費」として37,936円の支出が報告されているものの、それに対応する「大礼記念事業及施設」としては記念郵便切手類の発行や郵便局の臨時設置などが挙げられるのみで、献上品の調製は含まれていない⁽¹³⁾。この献上品についての記述が後の通信・郵政事業史にも一切見られないのは、それがそもそも省事業にあらず、当年度の年報に採録されなかったことに由来すると考えられる。



【図6】献上品受領証（出典は註6・挿図）

ではその資金はどのように調達されたのか。大正4年12月の『通信協会雑誌』大礼記念号には、同年11月8日に行われた全国三等局長会代表者の懇親会について報じた記事が載るが、これに出席した通信大臣の箕浦勝人によるものとして次のような発言が取り上げられている。

今回部内一同より献上品を捧呈することになったのにつき、現業備人をも之に参加せしむることとしたのは決して彼等に之を強制する主旨ではなく、畢竟上下同様にこの光栄を頌ちたいといふ、平等無差別の精神から出た訳であるから誤解のない様に……⁽¹⁴⁾

先述のとおり、献上品に関する最初の会議は大正5年4月4日に行われたが、この発言によればその前年秋には献上品捧呈が計画され、その主体を「部内一同」に定めていたことがわかる。箕浦は資金について直接言及してはいないものの、「決して彼等に之を強制する主旨ではなく」とあえて断っているのは、これに参加する現業備人にも金銭的負担が生じ、不満や反発が予想されたためと考えられる。大正4年度の『通信省年報』によれば、同年度末の職員100,225人のうち、雇員が40,607人、傭人が45,349人と、非官吏が全体の約85%を占めていた⁽¹⁵⁾。箕浦はこの献上の趣意をあらためて三等局長たちに説き、各現場職員たちの理解を促すよう求めたものと思われる。行政機関からの大正大礼献上品のなかでは、大正4年8月14日の府会で「概算八千円位」の予算を組んだという東京府の例が報告されている⁽¹⁶⁾が、各省庁は基本的に通信省と同じくその構成員を献上者としており、そのこと自体は異例ではない。しかし、その内訳は大蔵省が「在職官吏一同」、文部省が「文部本省並ニ直轄各部高等官判任官一同」などと官吏に限定しているものが多く、全職員を主体としていることが明らかなのはほかに農商務省のみである⁽¹⁷⁾。このような「上下同様」の参加は非官吏職員の多さを特色とする⁽¹⁸⁾通信省ならではの方針ともいえ、その取り組みの規模からも省事業史に付随して記憶されるべき重要性を有していると思われる。

13 通信大臣官房文書課編『通信省年報 第30回』通信大臣官房文書課、大正6年、23、27-45頁。

14 [一記者]「嵐峽に於ける全国三等局長会代表者大懇親会の記」『通信協会雑誌』第90号（御大礼記念号）、大正4年12月、101頁。

15 前掲、『通信省年報 第30回』、4-5頁。

16 前掲、高橋「大正大礼の東京府献上品「笠翁式書棚」」、53頁。

17 前掲、『大礼記録』、703-704頁。同省は「農商務省並ニ所管官衙職員総代農商務次官 上山満之進」を献上者の名義としている。

18 前掲、『通信事業五十年略史』、54頁。

(2) 画題の選定

① 選定者

次に、この献上品の画帖は全3巻36枚の絵図で構成されているが、その画題は誰が選定したのだろうか。樋畑の記事中の「献上品目録」には、「画題選定 神武御東征より徳川時代に至る 文学博士 三上参次」「明治時代より現代に至る 部内関係 局長」と書かれており、古代から江戸時代までの上中巻24図と、明治時代以降の下巻12図が別々の選定者の手になっていたことがわかる。

上中巻の選定者とされている三上参次(1865-1939)は、明治22年に東京帝国大学文科大学和文学科を卒業、28年の同大学史料編纂掛設置にあたって史料編纂委員に着任し、32年より編纂掛主任(大正5年当時は事務主任)として、「大日本史料」や「大日本古文書」の編纂を率いていた。また同年には同大文科大学教授、明治41年には帝国学士院会員に任じられ、『大札記録』の編纂にも携わっていた⁽¹⁹⁾。その学識や地位、大正大札との関わりからも、この画題選定には適任であったと考えられる。しかし、樋畑によれば実際の選定作業は三上によって一から行われたものではなかったらしい。上中巻に関しては「余に其の調査を囑せられてあつたから、先づ其の図画とすべき画題に就き幾多の事項を予選し、故友人文学士藤田明君に図り、夫より文学博士三上参次先生の考定を経て[……]選択決定せられた」と述べ、三上の関与に先立ち、樋畑自身の予選と藤田明への相談という段階があったことを明らかにしている。樋畑は博物館業務を通じて、またその傍らに交通史資料の収集や調査を行う研究者でもあり、大正4年10月に刊行された『経済大辞書：大日本百科辞書』では「日本交通史」の項目の執筆を担当している⁽²⁰⁾。樋畑が助言を求めたという藤田明(1877-1915)【図7】は明治32年の東京帝国大学文科大学国史科在学中に仲間と日本歴史地理学会を創設、おもに同学会誌『歴史地理』に東海道や中山道など交通史に関する論考を発表していた。職務としては明治36年から同大学史料編纂掛の史料編纂員、38年から編纂官として、三上のもとで「大日本史料」の編纂に従事していた⁽²¹⁾。詳細は明らかでないが、樋畑は19歳年下の藤田を「友人」「交通歴史に造詣の深き斯道唯一の学者」⁽²²⁾と評しており、以前から両者に交流があったことがうかがえる。三上が正式な画題選定者となったのも、藤田の人脈に頼った可能性もあるだろう。

なお、樋畑が藤田に意見を求めた時期は明らかでないが、藤田は腸チフスのため大正4年11月5日に39歳で急逝しており、これより以前であることは確かである。上述の箕浦通相が「今回部内一同より献上品を捧呈することになった」と発言したのは11月8日のことだが、このように献上の計画が公にされ資金調達が始まる以前から、その具体的な内容については水面下で検討が進んでいたことがうかがえる。また当館の校正用写真帖によれば、献上まで2か月に迫



【図7】藤田明(大正3年4月撮影)(出典は註21『征西將軍宮』・口絵)

19 前掲、『大札記録』、2頁、辻善之助「附 故三上参次先生略歴」三上参次『江戸時代史下』富山房、昭和19年、683-703頁。
20 樋畑正太郎「日本交通史」『経済大辞書：大日本百科辞書』同文館、大正4年10月、3155-3163頁。なお、樋畑が本格的に論文や著作を発表するのは昭和に入ってからで、交通史関係の主著は『江戸時代の交通文化』刀江書院、昭和6年、『日本交通史話』雄山閣、昭和12年、三井高陽と共同監修『日本交通史料集成』全3巻、国際交通文化協会、昭和13年など。
21 藤田明編著『征西將軍宮』文献出版(復刻版)、昭和51年、1-7頁、大島延次郎『日本交通史論叢』国際交通文化協会、昭和14年、460頁。
22 樋畑雪湖「六華片々」『通信協会雑誌』第92号、大正5年2月、57頁。

大正6年11月12日に至っても、各画題に対しては三上の「検閲」による「字句の修正」が行われていた。その朱字は各局部長が選定した下巻の12題にも及んでおり、第4図「庸調夫の爲めに路傍に果樹を植ゑ……」で原案にあった主語の「孝謙帝」を削除するなど若干の単語を修正するほか、全題末尾に付されていた「……の図」という部分を一律に取り除いている【図1】⁽²³⁾。樋畑や三上が画題の構成にくわえ、その表現自体にも最後まで気を配っていた様子がかげえる⁽²⁴⁾。

このように、全3巻のうちいわば歴史部にあたる上中巻の画題が学識者によって選定されたのに対し、現業部にあたる下巻は「通信、管船、電気、為替貯金の各局長に於て夫々主管の主題に就きて選定」されたという。通信省は鉄道や航空関係業務を所管していた時期もあったが、大正5年当時は大臣官房のほか以上の4部局で編成されており、通信局長は田中次郎、管船局長は若宮貞夫、電気局長は棟居喜九馬、為替貯金局長は肥後八次であった⁽²⁵⁾。

②画題

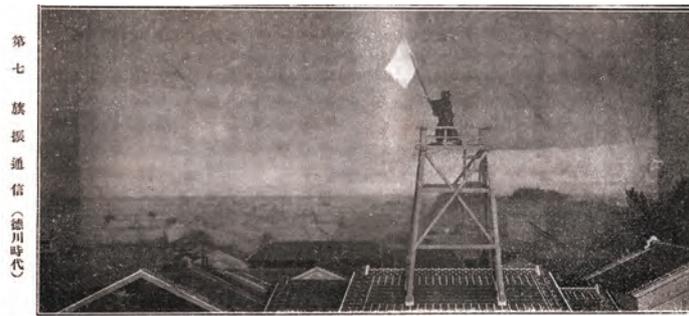
では、彼らによって選ばれた画題はどのようなものだったのか。上中巻は陸上交通に関するものが13図（第4、5、7-9、13、15、16、19-23図）、海上交通が7図（第1、6、10-12、17、24図）、河川交通が4図（第2、3、14、18図）⁽²⁶⁾と、陸上・水上双方の出来事が両巻に偏りなく取り上げられている。樋畑がどのように予選作業を行ったかは定かでないが、最終的な画題構成を見るかぎり、交通史が編年的に視覚化された先

例を参照した可能性が考えられる。その第一の例は前島密が駅通局御用掛青江秀に編纂させた明治15年刊の『大日本帝国駅通志稿』で、日本の通信史を主題とする口絵「大日本帝国信書往復沿革図」8場面と「増補 旧幕府駅伝ノ図」4場面が収められている⁽²⁷⁾。その画題をみると、献上品の第18図「大井川蓮台越の状態」は同書(十一)「大井川歩渡ノ図」【図8】、第21図「東海道中に於ける問屋場と本陣」は(九)「宿駅問屋場ノ図」などにおいて、すでに絵画化されていたことがわかる。第二の例は通信博物館が制作し、通信省が明治43年の日英博覧会に出品したジオラマ「通信沿革模型」で、奈良から江戸時代に至る通信機関の発達が7場面で表現されている⁽²⁸⁾。これについても、献上品の第9図「六波羅飛脚鎌倉に到る」はジオラマの第三「陣中の通信（鎌倉時代）」、第20図「元禄頃より発達したる大阪堂島の旗振通信」は第七「旗



【図8】(十一)「大井川歩渡ノ図」
(出典は註27・口絵)

- 23 その意図は明らかでないが、日本美術協会の展覧会でも明治30年代末から大正初期にかけて画題に「図」が付されなくなるとの指摘がある（大熊敏之「明治三十～四十年代の日本美術協会の日本画」宮内庁三の丸尚蔵館編『明治美術再見Ⅲ—近代日本画への途 明治三十年代～大正初期』(三の丸尚蔵館展覧会図録No. 11) 宮内庁、平成8年、5頁）。
- 24 三上自身も文章表現には強いこだわりがあったといい、「一寸した事務の往復照会の文でも、朱を以てべたべたと直され[……]されば論文著作に至つては、推敲に推敲を重ねられた」と伝えられている（前掲、辻「附 故三上参次先生略歴」、690頁）。
- 25 前掲、『通信事業五十年略史』、35-36頁。
- 26 第3図「僧行基道路を修め渡舟を置き布施屋を設く」は陸上交通にも関わるが、ここでは河川が中心的に描かれていることに鑑み河川交通に分類した。
- 27 このほか、第5図「大宰府に賜ふべき飛驒驛を内記をして封ぜしむ」は(一)部分「駅伝函の図」、第22図「早打及継飛脚の状態」は(五)部分「旧幕府継飛脚」と(十)「道中早追ノ図」、第15図「元和元年始めて大阪と江戸との間に三度飛脚を設く」は(六)部分「東海道三度飛脚」と、5題が共通する（『大日本帝国駅通志稿』駅通局、明治15年、口絵）。



【図9】第七「旗振通信（徳川時代）」（出典は註28・口絵部分）

振通信（徳川時代）」【図9】などにおいて造形化されている。『駅通志稿』編纂のために収集された「駅通志料」と総称される史料群や博覧会後に返還された「通信沿革模型」は通信博物館に収蔵されており⁽²⁹⁾、同館主任を務める樋畑は当然これらを意識していたはずである。最終的な画題構成は特定の体系をそのまま踏襲したものとはなっていないが、樋畑らはこのような複数の先例を念頭に置きながら、歴史的に重要かつ絵画化に適した題材を取捨選択していったものと思われる。

下巻については、明治2年の公衆電信創業（第25図）から大正2年のTYK無線電話機実験（第30図）までの前半部が近過去、第31図以降の後半部が現代を画題としている。その内容は、明治18年の通信省創設時に設置された通信局に関するものが7図（郵便：第26、28、31図、電信：第25、29図、電話：第30、32図）、同年設置の管船局が3図（第27、35、36図）、明治20年設置の為替貯金局が1図（第33図）、明治42年設置の電気局が1図（第34図）であり、部局ごとに画題数のばらつきがみられる。これはその設置時期や所管業務の規模に応じて割り当てられたものと思われるが、通信局と管船局の所管事業がそれぞれ江戸時代までの陸上・水上交通史の延長線上にあるのに対し、そもそも為替貯金という金融事業や電気事業は交通史と直接的な関係が見出しがたい。ここでは為替貯金局の業務風景とハツ澤発電所が画題となっているが、これらを「交通上重なる事項」として位置づけるのは不自然ともいえる。本作は交通史を題材とした歴史画連作を目指しながら、実際には通信省の現況を紹介するという役割をも負っていたために、このような無理が生じたものと思われる。

それでも、献上品を通じて省事業の歴史的背景と現在を視覚化しようとした例は管見の限りほかに見られず、十分に野心的な試みであったと評価できる。例えば文部省が大正大礼に際して献上した画帖には花鳥山水や美人画などが混在しており⁽³⁰⁾、省独自のテーマは見いだせない。通信省は画題の華やかさやめでたさよりも、その内容を重視して構成を練り上げたといえるであろう。

(3) 揮毫者の選定

このように画題が決定されたのち、これを当代の画家36人に依頼することとなった。樋畑によれば、画題の選定は「従来の献品の如く単に祝意に因んだ絵画の様に世の所謂大家を以てす

28 このほか、上掲第21図は第五「問屋場及本陣（徳川時代）」、上掲第15図と第22図「早打及継飛脚の状態」は第六「飛脚及早打（徳川時代）」と、4題が共通する（「日英博覧会通信機関に属する通信省出品説明」『通信協会雑誌』第19号、明治43年2月、口絵及び87-88頁）。

29 「駅通志料」と博物館の関わりについては前掲、井上「郵政資料館所蔵資料概要」、105-106頁、井上卓朗「駅通寮と通信・交通史」『郵便史研究』第52号、令和3年、1-5頁。「通信沿革模型」は大正6年3月末時点の『陳列品目録』（ALA-8）に掲載がある。

30 前掲、『祝美一大正期皇室御慶事の品々』、32頁。

るのは妙でない、殊に図題が大分専門的であるから其人の選択に困難である」との判断から東京美術学校（以下、美校）校長の正木直彦（1862-1940）に囑託され、正木が「幾度か其選み方に苦心せられた末に何でも其の得意の方面と図題の担当とを決定」したという。なお、正木は美校の依頼制作事業を推進したことで知られ、大正大礼に際しても複数の個人団体からの献上品制作を請け負っている⁽³¹⁾が、本作については同校の「依頼製作品生産報告簿」⁽³²⁾にも記録がなく、その一環に位置づけることはできない。揮毫者には当時の日本画科教授の結城素明と小堀鞆音、助教授の松岡映丘ほか卒業生9名が含まれる⁽³³⁾が、これらの美校関係者も大正5年7月21日に来省して湯川委員長から個別に依頼を受けており、美校を介して制作を請け負ったわけではないとわかる。依頼制作とは「学外からの依頼に応じて学校として作品を制作することを意味し、教官の個人的仕事はこの中に含まれない」⁽³⁴⁾ものであり、本作もこのような事例に該当するといえる。

では、正木はどのような人選を行ったのか。この献上品に関する本人の証言は確認できなかった⁽³⁵⁾が、実際に選定された画家の構成からはある程度その方針をうかがい知ることができる。

まず日本画家28名について、筆頭の第1図を手がける小堀鞆音は土佐派の川崎千虎に師事し、日本美術院から日本美術協会へと活動の場を移しながら、有職故実の研究を深めた歴史画の第一人者である。本作の揮毫者には小山栄達や川崎小虎、尾竹国観といった小堀門下生のほか、小山らが明治31年に結成した紅児会（明治33年までは紫紅会、-大正2年）に加わり、歴史画の研鑽を積んだ長野草風、小林古径、中村岳陵がみられる。また梶田半古、小林、尾形月耕、池田輝方、鏑木清方は小堀自身が明治35年に組織した歴史風俗画会（明治35-?年）に集い、ともに歴史風俗を研究した画家たちである。またこのような小堀の系譜のほか、烏合会（明治34-45年）において浮世絵に根ざした新しい風俗画を目指した池田、鏑木、河合英忠、山村耕花や、无声会（明治33-大正2年）において自然主義的写生画を追求した川端玉章門下の結城素明、渡邊香涯、平福百穂など、明治末から大正初めに乱立した新派系小団体に属し、歴史画や風俗画に新風を吹き込んできた画家が多く選ばれている。これらの揮毫者の多くは大正5年の依頼当時30~40代前半の壮年期にあり⁽³⁶⁾画壇の主力となっていた。当時の日本画壇は明治40年来の文部省美術展覧会と、大正3年に文展から離反した在野の再興日本美術院展覧会が競合していたが、正木は両展覧会から中心的な画家を選定している。小堀が第1回より審査委員を務める文展では大正4年秋の第9回展に出品した揮毫者10名のうち9名が褒状以上の受賞者⁽³⁷⁾であり、またとりわけ松岡映丘、鏑木、結城、平福は大正5年4月に金鈴社（大正5-11年）を結成して注目を集め、その後も清新な画風で文帝展を索引していく面々である。一方、再興

-
- 31 吉田千鶴子「東京美術学校依頼製作資料」『東京藝術大学美術学部紀要』第13号、昭和53年、109頁、同「美校の経営戦略・依頼製作事業」『藝大通信』第13号、平成18年、14-15頁。
- 32 美校当局が大正3年から昭和17年までの依頼製作品全件名を記録したもの。本稿ではこれを網羅した先行研究を参照（前掲、吉田「東京美術学校依頼製作資料」、93-95頁）。
- 33 教員の在職状況は財団法人芸術研究振興財団/東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史東京美術学校篇』第2巻、ぎょうせい、平成4年、850-853頁。卒業生は中村、山村、川崎、野生司、渡邊、平福、矢澤、篠田、中澤（「GACMA 東京美術学校在籍者一覧（明治22年~昭和9年入学者）」<https://gacma.geidai.ac.jp/contents/enrollment/>令和5年12月30日アクセス）。
- 34 前掲、吉田「東京美術学校依頼製作資料」、81頁。
- 35 正木直彦著・隅元謙次郎編『十三松堂日記 一卷』[明治40~大正15年分]中央公論美術出版、昭和40年、正木直彦『回顧七十年』学校美術協会出版部、昭和12年。
- 36 日本画揮毫者全体のうち40代後半以上は小堀、梶田、尾形、樋畑のみで、ほかは26才の中村を最年少とし、みな30~40代前半である。
- 37 池田・鏑木が二等賞、松岡・河合・尾竹が三等賞、町田・山田・小山・平福が褒状、山村は落選し、再興院展に活動拠点を移す（日展史編纂委員会編『日展史4：文展編4』日展、昭和55年、34-40頁）。

院展側からも同年秋の第2回展で好評を博した同人の小林や中村をはじめ、まもなく同人に推される長野や川端龍子、院友の西村青帰や野生司香雪といった中堅画家が選ばれている⁽³⁸⁾。なお、ここには歴史画よりも概して花鳥山水や動物画を得意とする旧派の日本美術協会や京都画壇の出身者は含まれていない。これらはむしろ皇室が伝統的に後援し、積極的に収集を行ってきた画派といわれるが、正木はこのような「皇室のお好み」⁽³⁹⁾より、画題への適性を重視したと考えられる。

次に洋画家8名について、筆頭の第3図を手がける二世五性田芳柳はチャールズ・ワーグマンや工部美術学校のお雇い外国人から教授された西洋絵画技術を生かし、迫真的な歴史画や戦争画で名声を博していた⁽⁴⁰⁾。一方、第36図の末尾を飾る東城鉦太郎は二世芳柳と同じ51歳で、明治34年の明治美術会解散後はともに巴会を結成、海軍省の命で制作した日露戦争海戦画で知られていた。このほかについては、白馬会(明治29-44年)の創設会員ながら画壇を離れて通信博物館技手を務めていた小代為重⁽⁴¹⁾を除き、文展審査委員の中川八郎をはじめ、渡邊審也、中澤弘光、三宅克己、石川寅治はみな文展を舞台に活動していた40歳前後の画家である。画派としては、中川、渡邊、石川は明治34年に明治美術会を引き継いだ太平洋画会の、中澤と三宅は明治44年に実質上白馬会の後身となった光風会の創立メンバーであり、洋画新世代の旧派と新派が織り交ぜられているといえる。なお、当時の洋画壇は明治43年の『白樺』創刊を機にポスト印象派やフォーヴィスムなど西洋の新しい潮流が流入し、明治45・大正元年のフェウザン会、大正3年の二科会、大正4年の草土社といった在野団体が次々に創立していたが、本作ではこれらの新動向に与する画家は見られない。

樋畑はこれらの揮毫者について、「兎にも角にも大正の御代に於ける日本美術東西洋新旧画派のいろいろを代表網羅したと云ふてよいのであるから、千百年間の後に至りなば大正時代の日本絵史を見る様なこちがするであらう」と評しているが、厳密には日本画の旧派や京都画派、洋画の在野諸団体はこれに含まれず、当時の美術界の単純な縮図とはなっていない。これは正木が美校内外のさまざまな画派に広く目を向けながらも、歴史画や風俗画への適性を第一に考えて選定を行った結果とみることができるであろう。

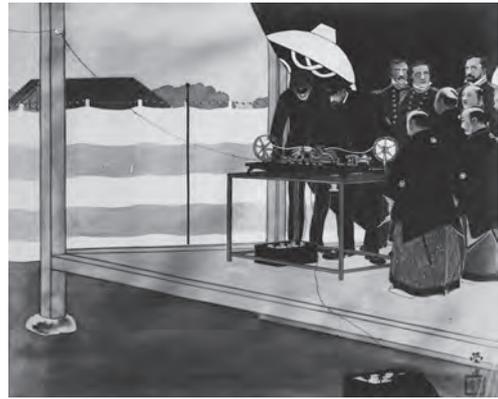
(4) 制作過程

では、各画家は与えられた画題を描くにあたり、どのような制作過程を経たのだろうか。樋畑は一部の画家について「長野草風氏は京都に国宝架橋蔓陀羅⁽⁴²⁾を、渡邊香涯氏は志州鳥羽無線電話の写生に、川崎小虎氏は伊豆の戸田に維新前の造船の跡を探る等の類、是等は本省か

-
- 38 日本美術院百年史編集室編『日本美術院百年史 4巻』日本美術院、平成6年、468-469、962-967頁。
 39 大熊敏之「官展の美術—三の丸尚蔵館所蔵の大正から昭和初期にかけての諸作をめぐって」宮内庁三の丸尚蔵館編『官展を彩った名品・話題作：大正～昭和初期の絵画と工芸』（三の丸尚蔵館展覧会図録No. 38）宮内庁、平成17年、7頁。
 40 明治43年の日英博覧会では農商務省囑託としてパノラマ絵画「日本古代ヨリ現代ニ至ル風俗変遷図」12場面を制作し、名誉賞を受けている（今泉宜子『明治神宮：「伝統」を創った大プロジェクト』新潮社、平成25年、281-283頁）。
 41 詳細は拙稿「『ペリー献上電信機実験之図（油絵）—通信博物館における展示解説画の一例として—」『郵政博物館 研究紀要』第12号、令和3年3月、146-148頁。
 42 樋畑は長野について「此の図を作製するに方りても態々京都の博物館に国宝架橋蔓陀羅を研究に出かけられた程の篤志の人」と別の記事でも言及している（樋畑雪湖「口絵解説」『通信協会雑誌』第120号、大正7年6月、21頁）。この「国宝架橋蔓陀羅」は左前方から橋をとらえる視点や2隻が寄り添うような小舟の描写が鎌倉時代の掛幅縁起絵「山崎架橋図」（和泉市久保惣記念美術館蔵、重要文化財）を想起させるが、特定には至らなかった（和泉市久保惣記念美術館編『和泉を彩る文化財：和泉の文化財と東洋美術の名品：市制五十周年記念特別展』和泉市久保惣記念美術館、平成18年、58、122頁）。

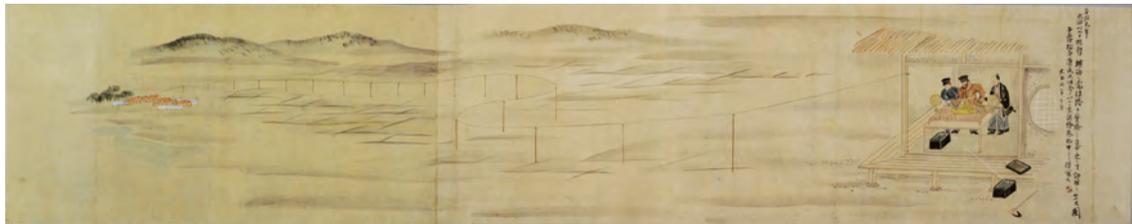
ら紹介状を付したから知れてゐる」と言及しており、古画に範を求めた画家や現地取材に赴いた画家がいたことがわかる。以下では、このうち先行図像を参照したと思われる絵図を三例挙げたい。

第一の例は、小山栄達による第23図「亜米利加合衆国の使節横浜の応接所に電信機の実験を幕吏に示す」【図10】である。これは嘉永7（1854）年、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが徳川将軍への献上品として持参したモールス電信機を用い、横浜海岸の応接所とその約1km内陸に位置する中山吉左衛門宅のあいだで通信実験を行ったことを描くものである。本図には二方を開放した



【図10】第23図「亜米利加合衆国の使節横浜の応接所に電信機の実験を幕吏に示す」（小山栄達）

屋内を戸外からとらえる視点、台上の電信機とそこから柱の上部へ延びる電信線、台下と縁側前の地面に置かれた箱状の電池とこれらを結ぶ導線などがみられるが、このような要素は当館に収蔵される「嘉永七年米国使節実験電信機図（巻物）」【図11】の冒頭部分によく似通っている。巻頭の書き込みによれば、この画卷は「松平康民氏所蔵ノペリ来朝絵巻物」（現存不詳）を大正6年3月に樋畑が模写したもので、その「絵巻物」は黒船来航当時、狩野派の絵師・鉞形赤子（1800-1855）が实景に取材して描いたとされる「米国使節ペリー渡来絵図写生帖」（東京大学史料編纂所蔵）を下敷きにしたものと推定されている⁽⁴³⁾。献上品の各図の提出が完了したのが大正6年10月下旬頃とされているので、小山は本図の制作にあたり、樋畑によって模写されたばかりの郵政博物館本か、もしくはその原図となった「ペリ来朝絵巻物」を参照した可能性が考えられる。



【図11】樋畑雪湖「嘉永七年米国使節実験電信機図（巻物）」卷子1巻より部分、紙本着色、29.6×405.5cm、大正6年3月模写（FEA-9）

両者を比較すると、先行する画卷には藁葺屋根の室内に3名の人物が配されるのみだが、本図では戸外に縞柄の幔幕、室内には応接所第三委員井沢美作守の家紋である三つ寄せ笠の入った幕が張られ、日米双方の10名の人物がひしめくように描かれている。この相違は、画卷が通信実験の内陸側の拠点である吉左衛門宅を主要場面として描いているのに対し、本図の画題が海側の拠点である「横浜の応接所」に設定されていたためと思われる。小山は画卷に描かれた吉左衛門宅の構図、通信機器の配置や構造を踏襲しつつも、そこに応接所にふさわしい設えや人物群を加えることで、舞台の転換を図ったものと考えられる。

第二の例は、結城素明による第26図「明治四年始めて東京大阪間に郵便通送を開く本図は最初の郵便局にして其当時四日市郵便役所と称す東京江戸橋畔にありたる幕府の魚会所を仮用せ

43 前掲、拙稿「『ペリー献上電信機実験之図（油絵）』」、138-139頁。

しもの」【図12】である。これは郵便創業当時に日本橋四日市に設置された郵便役所を主題とするもので、その全体の構図や建物の描写は明治5年撮影とされる写真⁽⁴⁴⁾【図13】に酷似している。本図左後景に描かれた平屋の郵便役所とその右側の冠木門内に見える駅通司は、両者の位置関係や建物の構造、郵便役所の鬼瓦や窓口前の街灯といった細部まで写真と一致している。この写真は当館に複数の紙焼き（AC-1、AZ-4、BDD-1-1）が伝わっており、個々の来歴は明らかでないものの、これらを博物館で拡大模写したと考えられる油彩画（AKQ-2）が昭和9年の展示室にみられる⁽⁴⁵⁾ことから、大正期には収蔵されていたとしてもおかしくない。

両者を比較すると、写真では郵便馬車が1台とその背後にごく小さく人車と徒歩の人物が写るのみのに対し、本図では徒歩や馬車、騎馬などさまざまな手段で郵便物を運ぶ集配・通送人や、郵便役所の窓口を訪れる利用者、道を行きかう人々がにぎやかに描き加えられている。左前景、右中景、中央後景と偏りなく配置された人物群は本図にかえてジオラマ的で生硬な印象をもたらしてはいるが、創業時より使用され、明治17年に正式な郵便徽章となった「丸に一引き」のマークが馬車の郵便旗や集配員の制服に繰り返し描かれるなど、結城が当時の郵便事情を明示的に伝えようと心がけたことがうかがえる。

第三の例は、尾竹国観による第28図「明治三十七八年戦役に於ける野戦郵便局局前に全国の新聞社より寄贈せる新聞の縦覧所を設く」【図14】である。本図は日露戦争時の野戦郵便局における業務風景とその敷地内に設けられた兵士慰問のための新聞縦覧所⁽⁴⁶⁾を描くものだが、これは通信省日露戦役記念絵葉書のうち、樋畑が図案を手がけた「第四回戦役記念 交通ノ部」3枚組のうちの1枚「野戦郵便局」【図15】に共通する要素がみられる。本図の左後景に描かれる新聞縦覧所は、天幕の形状や「シンブンジウランシヨ」と片仮名で書かれた札、新聞を広げて読む兵士たちの姿が絵葉書上段の写真「野戦郵便局内ノ新聞縦覧所」と類似している。また、右後景には野戦郵便局舎、前景にはその業務風景が描かれるが、現地の民家を徴発したという草葺きの局舎や、戸口右側に掲揚された郵便旗、局前に山積みされた郵便行囊や二頭立ての郵便馬車は、下段の「野戦郵便局ノ郵便物発着」に全体の構図と各要素が似通っている。



【図12】 第26図「明治四年始めて東京大坂間に郵便通送を開く本図は最初の郵便局にして其当時四日市郵便役所と称す東京江戸橋畔にありたる幕府の魚会所を仮用せしもの」（結城素明）



【図13】 「駅通司と四日市郵便役所」（BDD-1-1）

44 詳細未詳。駅通司は明治4年7月28日に大蔵省に属してその省内に移転したが、同年8月10日に駅通司が駅通寮に昇格、翌明治5年3月2日に大蔵省内から四日市に再度移転した。写真はこの再移転時に撮影されたものと伝わっている（AC-4、BDD-1-1の写真資料保管票を参照）。

45 昭和9年9月28日撮影の「博物館内第一展示室“郵便”」（WAB-18）に「駅通寮と郵便役所」と題され額装展示された様子が写る。また、『通信博物館物品調書 昭和12年』（ALA-18）「一、郵便ノ部（5）絵図 二 書画 22番」に「駅通寮ト郵便役所ノ画（額縁入）」の項目がみられる。

46 明治37年2月特秘第133号にもとづくもので、内地新聞社から寄贈を受けた新聞雑誌を兵士の閲覧に供する設備（通信局『明治三十七八年戦役 軍事郵便始末 附録 艦船郵便報告書』（BAA-142）、187-188頁）。

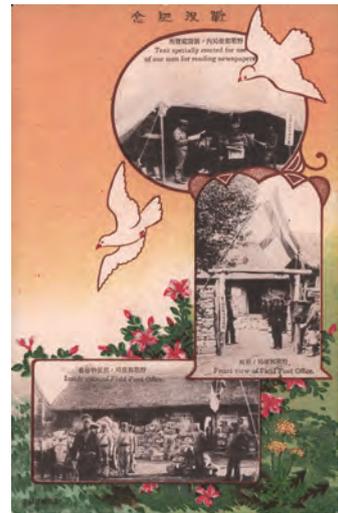
また戸口に掛けられた折畳郵便箱には桜花に囲われた通信徽章と「FIELD POST」の文字が細かく描き込まれているが、これは中段「野戦郵便局ノ前面」に写るものである。これらの素材となった写真は当館にも後世の複製とみられる紙焼き写真【図16】が伝わっており、明治37年3月に陸軍動員され、第二軍兵站の軍事郵便監査として従軍した樋畑が絵葉書制作のための資料として収集したものと考えられる⁽⁴⁷⁾。なお、これらは樋畑本人が撮影した可能性もあるが、【図16】は博文館が明治38年7月に発行した『日露戦役記念写真帖』第2輯にも「第四十二箭楼子に於ける第二軍司令部野戦郵便」として掲載されるもので、同出版社の従軍写真班⁽⁴⁸⁾が撮影したものを借用した可能性もある。いずれにしても、尾竹はおそらく樋畑や通信博物館を通じて、この絵葉書かその素材となった一連の写真を参照したと推測される。

両者を比較すると、【図16】の写真では大半の被写体が撮影者に向って直立しているが、本図では局員が郵袋の積み下ろしを行うなど、より動的に描きあらわされている。また、写真では馬車右側の苦力が短髪で作務衣のような服を着ているが、本図では辮髪や襟裾に特徴のある上衣といったより異国風の身なり⁽⁴⁹⁾に改変され、さらにこれに指示を出すかのように筆記具と手帳をもった主任郵便吏が右隣に描き加えられている。尾竹はこれらの変更により登場人物の役割を明確化し、画面に臨場感を与えようとしたと考えられる。

以上に挙げた例からは、揮毫者たちが確かな先行図像を参照しつつ、さらに画題をより生き生きと描出するために創作上の工夫を凝らしたことがうかがえる。また、それらの資料はいずれも通信博物館との関わりが深いもので、おそらく樋畑がその提供に積極的に協力したと推測される⁽⁵⁰⁾。



【図14】第28図「明治三十七八年戦役に於ける野戦郵便局局前に全国の新聞社より寄贈せる新聞の縦覧所を設く」(尾竹国観)



【図15】「第四回戦役記念 交通ノ部」より「野戦郵便局」明治38年10月15日発行



【図16】「野戦郵便局箭楼子第二軍第二局舎での通送」(BEE-6)

47 樋畑はこの従軍で「絵葉書資料のスケッチ若くは写真撮影等の図案材料を齎〔もたらし〕て〔同年11月に〕帰朝した」と回顧している(樋畑雪湖『日本絵葉書思潮』吉田一郎、昭和11年、18-20頁)。なお、絵葉書上段「野戦郵便局内ノ新聞縦覧所」の素材となった写真は後藤康行「戦時下における軍事郵便の社会的機能—メディアおよびイメージの視点からの考察—」『郵政資料館 研究紀要』第2号、平成23年3月、63頁に掲載。

48 久村敬次郎編『日露戦役記念写真帖』第2輯、博文館、明治38年、頁番号なし。同書の弁言によれば、博文館は「第二軍の允許を得て写真技師を従軍せしめ……到る所戦地の光景は具に撮影し」という。

49 これに似た男性が当館に伝わる別の写真「野戦郵便局」(BEE-5)に確認できる。

50 樋畑が絵画における考証を重視していたことは数々の逸話から知られ、本件においても揮毫者への助言や資料提供を進んで行ったと考えられる(前掲、拙稿「『ペリー献上電信機実験之図(油絵)』」、145頁)。

おわりに

以上にみたように、大正大礼献上品《日本交通図絵》の制作は逓信省職員全体を巻き込んだ一大プロジェクトであり、その内容も省事業を歴史画連作で表現するという革新的なものであった。その画題選定や揮毫には当代一流の学者や画家たちが参加しており、本稿で挙げた各絵図は確かな先行図像の参照によって史実に即した描写が追求されていた。その実現にあたっては逓信博物館主任の樋畑が運営上の実務から画題の予選、揮毫者への資料提供、さらには外函の図案制作や第33図の揮毫まで自ら手がけており、最大の功労者といっても過言ではない。

最後に、この献上品の存在が事業史上忘れられていく一方で、その絵図のうちすくなくとも13図がおもに戦前までの出版物⁽⁵¹⁾や逓信博物館の展示において繰り返し二次利用されていたことも付言しておきたい。これらは逓信省側に残された校正用写真帖から複製されたものと思われるが、その大半において出典が献上品であることが明記されず⁽⁵²⁾、各絵図は本来の文脈から切り離されもともと独立した作品であるかのように取り上げられていた。これらは昭和15年に刊行された『逓信事業史』の挿図や博物館の展示解説画【図17】⁽⁵³⁾に姿を変え、それぞれ省公認の正統な歴史イメージとして受容されていく。このように本作が当初想定された以上の社会的影響力を及ぼしたことも、その重要性を考える上で欠かせない視点であろう。本稿を機にその存在が知られ、逓信事業史や交通史、日本近代美術史の分野においてさらなる分析につながることを期待したい。



【図17】「博物館々内」(昭和14年10月25日撮影)
(WAB-49)

【巻末資料凡例】

- ・図版は郵政博物館収蔵の画題校正用写真帖「日本交通図絵」全3冊(SAA-87~89)からあらたにスキャンし、変色と退色による不明瞭なイメージは彩度とコントラストを補正した。なお、当館には昭和58年に原写真を撮影したネガフィルムと、これに基づく複製写真(SEA-1~36)及びデジタルデータが収蔵されるが、その半数弱においてトリミングによる署名部分などの欠損がみられるため、本稿では使用しなかった。
- ・著作権保護期間にある中村、鎬木、川崎、野生司、篠田による各図は著作権法第47条に則って掲載した。
- ・本来《日本交通図絵》に図番号はないが、本稿では便宜上、上巻冒頭の小堀鞆音作を第1図とし、以下中下巻まで順に番号を割り当てた。
- ・画題と揮毫者の情報は前掲、樋畑「献上品に就て」、18-19頁に依拠し、表記は一部旧字体を新字体に改めている。

(くらち のぶえ 郵政博物館学芸員)

- 51 省事業史としては逓信省編『通信事業五十年史』逓信省、大正10年(献上品の第9、22、23、25、28、30図を掲載、以下同)、逓信省編『逓信事業史』第2・7巻、逓信協会、昭和15年(第8、9、15、16、18、26、28図)、郵政省編『郵政百年史』逓信協会、昭和46年(第5図)。このほか逓信省の協力によって民間から刊行された大阪毎日新聞社・東京日日新聞社編『通信事業発達史』大阪毎日新聞社、東京日日新聞社、昭和3年(第6、25、28図)や逓信六十年史刊行会編『通信六十年史』逓信六十年史刊行会、昭和5年(第23、25、28、30図)にも使用されている。
- 52 大正10年刊の『通信事業五十年史』には第9、22、28、30図のキャプション末尾に「大礼奉賀献上日本交通絵巻[ママ]の内」と付記されるが、これ以降の事業史には出典情報がない。
- 53 第28図の複製写真とみられる図が額装され、軍事郵便用品とともに掲示されている。図の下部には「明治三十七年戦役当時の野戦郵便局状況」とのキャプションが添えられ、現物資料の使用状況を視覚的に説明する役割を果たしていたことがうかがえる。展示解説画については前掲、拙稿「『ペリー献上電信機実験之図(油絵)』」、143-145頁。

【卷末資料】《日本交通図絵》

上卷「桜の巻 神武天皇御東征以来織田、豊臣時代に至る交通上重なる事項を画く」



第1図 「神武帝速吸の門に珍彦を得て東征の嚮道となし給ふ」(小堀鞆音)



第2図 「大化二年僧道登始めて宇治橋を架す」(長野草風)



第3図 「僧行基道路を修め渡舟を置き布施屋を設く」(五性田芳柳)



第4図 「庸調夫の爲めに路傍に果樹を植ゑ又糧米を給し賜ふ」(松岡映丘)



第5図 「大宰府に賜ふべき飛驒函を内記をして封ぜしむ」(梶田半古)



第6図 「遣唐船難波津を出帆す」(渡邊審也)



第7図 「國司の巡行」(村田丹陵)



第8図 「平安朝に於ける羈旅中の假宿」(小林古径)



第9図 「六波羅飛脚鎌倉に到る」(町田典江)



第10図 「八幡舶の支那沿海跳梁」(中澤弘光)



第11図 「堺港に於ける外國貿易の殷盛」(河合英忠)



第12図 「秀吉九鬼嘉隆をして大船日本丸を造らしむ」(勝田蕉琴)

中巻「葵の巻 徳川時代に於ける交通上重なる事項を画く」



第13図 「家康東海東山両道に一里塚を築き且つ樹を其の上に植しむ」
(中村岳陵)



第14図 「吉田了以始めて富士川に舟楫を通す」
(川端龍子)



第15図 「元和元年始めて大阪と江戸との間に三度飛脚を設く」
(尾形月耕)



第16図 「正徳一年江戸日本橋畔に始めて駅通人馬定賃銭の高札を掲ぐ」
(池田輝方)



第17図 「寛永年間河村瑞賢の建策により志州菅島附近に篝火台を設け通航の標識となす」
(山田敬中)



第18図 「大井川蓮台越の状態」
(山村耕花)



第19図 「箱根関所」(小代為重)



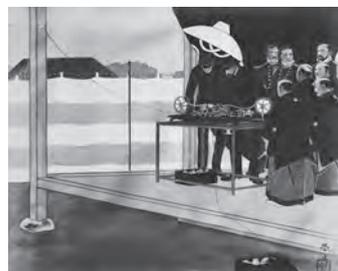
第20図 「元禄頃より発達したる大阪堂島の旗振通信」
(西村青帰)



第21図 「東海道中に於ける問屋場と本陣」
(小泉青堂)



第22図 「早打及継飛脚の状態」
(鍋木清方)



第23図 「亜米利加合衆国の使節横浜の応接所に電信機の実験を幕吏に示す」
(小山栄達)



第24図 「安政年間幕府伊豆の船匠に命じて始めて肋骨ある君澤形帆船を造る」
(川崎小虎)

下巻「菊の巻 明治時代より現代に至る交通上の重なる事項を画く」



第25図 「明治二年始めて横浜東京間に電気通信を開く本図は横浜裁判所構内に設けたる伝信機役所にして最初の電信局なり」
(野生司香雪)



第26図 「明治四年始めて東京大阪間に郵便遞送を開く本図は最初の郵便局にして其当時四日市郵便役所と称す東京江戸橋畔にありたる幕府の魚会所を仮用せしもの」
(結城素明)



第27図 「始めて高等海員の養成に使用したる練習船成妙号を隅田川に繋留して商船学校に充つ」(三宅克巳)



第28図 「明治三十七八年戦役に於ける野戦郵便局局前に全国の新聞社より寄贈せる新聞の縦覧所を設く」(尾竹国観)



第29図 「明治四十一年始めて設置したる銚子の無線電信局」(中川八郎)



第30図 「鳥羽に於ける逓信省式無線電話の実験」
(渡邊香涯)



第31図 「現代の郵便局舎一斑」(平福百穂)



第32図 「現代の電話交換局に於ける交換室」
(矢澤弦月)



第33図 「現代の郵便為替貯金事業一斑」
(樋畑雪湖)



第34図 「現代の水力電気甲斐国八ツ澤発電所の光景」(石川寅治)



第35図 「現代の灯台と船舶信号所」(篠田栢邦)



第36図 「現代の造船所」
(東城鉦太郎)